

平成 22 年度第 2 回小田原市環境再生プロジェクト検討委員会概要

1 日 時 平成 22 年 7 月 8 日 (木) 19:00 ~ 21:00

2 場 所 第 3 委員会室

3 出席委員 (9 名)

小澤委員長・星野副委員長・近藤 (増) 委員・大野委員・香川委員
・森谷委員・近藤 (忠) 委員・村越委員・山本委員

4 事務局職員 (4 名)

井澤次長、藤澤課長補佐、小鷹主査、勝俣主事

5 委員会の概要

(1) 実証 (モデル) 事業の進捗状況について

(資料 1 に基づき藤澤課長補佐より説明)	
小澤委員長	3 つのテーマについて検討委員の方からご説明いただきたい。まずは、の河川・水質保全の取組みから、大野委員にお願いする。
大野委員	<p>菊川について具体的なアクションプランであるが、酒匂 11 区・8 区・南鴨宮 4 区の自治会にまたがっている。私が所属している地区は 11 区であり 5 月 9 日に花植え会を実施し好評で終わった。5 月 30 日、6 月 27 日に老人会を中心に 10 名程度が集まり草取りを実施した。花に関しては自治会でもインパクトが強く好評であった。</p> <p>8 区については、6 月 13 日に親水公園で実施。実施前に草取りをしたり、花壇が水で流れたところの修復作業を実施した。開催については実施前に回覧板を回したが、参加者は自治会長とその他数人の参加だった。見学者は数名いて、その中に井藤さんがいた。</p> <p>4 区については、7 月 4 日に自治会の一斉清掃があり、川べりの清掃を実施した。井藤さんも来ており、その他中心人物との顔合わせに成功。協力して実行していく旨を話し合った。</p> <p>今後の予定であるが、3 自治会の連携で予算などを組み計画を実施していければと思っている。</p> <p>共通課題として、花の苗・肥料などの材料が必要である。調達方法などを考えなければならない。プランターなどリサイクルのものを使用する。</p> <p>今後の予定として 8 月 8 日に親水公園で自然観察会を実施する。井藤さんの協力を仰いでいきたいと思っている。</p>
近藤委員	フィールドを特定されることに不満を持っている方はいる。モデル (実証) 事業の場として広い範囲を設定するべきである。地域内の誰もが活動できるような仕組みづくりが重要である。
小澤委員長	次に、鴨宮 5 区の取組みについて近藤忠委員にお願いする。
近藤忠委員	<p>2 回目のワークショップ以前から提案者の高砂さんとの接触している。7 月 3 日に清掃活動を行ったが、その前に大野委員・村越委員・行政等が 6 回足を運び、電話連絡はその 2 倍は行った。</p> <p>最初は 5 月 2 日に現地に行き、高砂さんと地元の助っ人の岩瀬さん</p>

	<p>と接触し、問題を提起された。活動の課題としては、夏の土用干しの時期に水路の臭いが気になる。また、ごみが多く捨てられている現状があり、地域の用水路なので地元の協力の下、より良くしていきたい。との要望があった。</p> <p>当日は水路を見学し、親水公園まで行き、実際にこんな状況を目指したいとの思いを共有した。</p> <p>実際の活動にあたり、5月頃具体的な計画について大野委員からメニュー提案や計画策定など意見交換した。材の保管場所や計画のつめを行った。</p> <p>5月27日に核となる2人、大野委員と私の4名でつめの話し合いを行い、将来の計画図を描いた。今後、地元小学校・中学校が絡んだイベントを実施できたらと考えていた。</p> <p>その後、計画場所が神奈川県農政課の管轄である農業用水路であることが判ったため、行政・自治会とコンタクトをとり実際に作業を協働実施しようと決定した。</p> <p>6月20日に地元の鴨宮5区で、清掃の会議が開催された。当初は委員も参加するつもりであったが、自治会が絡むと難しい問題が生じる可能性があるため、自治会主体で実施してもらった。</p> <p>7月2日に自治会長を訪ねて、検討委員会の内容等を説明し、7月3日に県行政職員4名と5区の自治会10名と水路の管理者と行政、近藤、村越で実施した。</p> <p>5区では自治会が参加しての実施が初めてだったので、水路脇の草取りなども実施した。用水路に実際に入る者と分かれて作業を行った。ごみはトラック一台ほどあり、実際に地域のごみを清掃することが関心を仰ぐことができたのではないかと思います。こういった地域密着型の取組みが他の取組みへとつながっていくのではないかと考えている。</p>
小澤委員長	実際に農業をやっている人はどの程度いらっしゃるのか。
近藤忠委員	<p>上流の地区にはいらっしゃる。上流の地区では農業者が集まり、実際に用水路の清掃活動を実施している。</p> <p>鴨宮5区は農業者が1名いらっしゃるだけで、今までは県が主体となって動いていたため自治会は全く関わっていなかった。</p>
小澤委員長	色々な主体があって良いと思う
星野副委員	土地改良区農業用水ということであるが、生活廃水は入れているのか。
近藤忠委員	実際に清掃してみると、溝くさい。県の職員によると上流と下流だと水質の差は歴然である。生活廃水の制限はしておらず、おそらく浄化槽が機能していないのではないかと思います。詳しいことは不明である。
井澤次長	下水道整備は終わっているはず。あの裏手が特定区域だった。
星野委員	農業用水路で用水という目的がはっきりしているのであれば、管理者が中心となってくるはず。生活排水が流入しているのであれば、地域水路として解釈することが出来る。法的なことははっきりしなければならぬ。
小澤委員長	森林のテーマについて、近藤増男委員からお願いしたい。
近藤増男委員	森林については地権者、ものをつくった時の販売ルート、人数的なフォローなどの問題がある。約2反3畝の土地があり、たまたま荻窪の地権者を知っていたのでコンタクトをとった。藤沢在住の妹さんが地権者になっており、自分も手入れがしにくいところから是非整備をお願いしたいとおっしゃっていた。行政と現地を実際に見に行き、森

	<p>のなかまのメンバーとどのようなフォローが出来るのか、間伐の時期や下草刈りの時期など具体的な内容について話し合った。下草刈りは夏行くと蜂がいるので避けることもあるが、夏休みの時期に合わせて行ってもよい。</p> <p>フォローの面であるが森のなかまの方々、里地里山のメンバーと一緒に材木屋さんもいるのでそういったメンバーを誘って応援することはできる。主体は森のなかまであり、いずれにしても応援体制はとれると思う。</p> <p>間伐すると、大きい木が盗まれる可能性がある。間伐したものについては、切る長さも決めなければならない。また、間伐の使用方法を地権者と早い段階で話し合わなければならない。実際に間伐を実施し、周りを整備し、間伐を利用することができれば、これが他地域へと広がり波及効果を持たせることも可能になる。</p> <p>里地里山協議会のメンバーなどもお手伝いできる。森のなかまのメンバーがどの程度この取組みに参加できるのかが鍵となる。間伐範囲が広すぎるといっているのであれば、お手伝いできる。下刈りなどは1人でも1反くらいは可能である。私の考えではそんなに苦にならないと思う。</p> <p>駐車場の問題であるが、隣に茶畑があるのでそこを利用できる。山が綺麗になることで茶畑の所有者にも喜ばれると思う。時期などは専門家に仰いだほうがよい。間伐の際にも指導を仰ぐことができる。育林隊の皆様にも声がけするなど、早めに調整したいと思う。</p> <p>流れについては行政が案をつくってくれた。作ったものに対しての販売等は11月に実施予定の緑化フェアなどに参加できないか。日曜日にフラワーセンターで、地元の間伐材を加工したものという形で販売したい。また、わんぱくランドも販売フィールドになると思う。</p> <p>参加協力者と話し合いの場を持つことで、場所などの確保が可能になる。面積的な問題など私がフォローできる範囲で実施したい。12月末までにできることを活動していければと考えている。</p>
山本委員	<p>今お聞きしていて整理でききれないことがある。流れについては把握しているが、具体的な主体はどこか、他の団体との関わりをどのように築いていくのかが明確にならないとアクションプランを具体化することができない。横のつながりをどのように持ち行政とのつながりをどう持っていくか。また、コーディネーターがいなくなかなか動いていかないのではないかなという心配がある。</p> <p>森のなかまは現在活動しているフィールドがあり、日程なども細かく詰めていかないと動けない部分もある。具体的にもう少し細かくしていかないと動けないのではないかなと思う。</p> <p>材は切ってから乾かして加工するまでにかなり時間を必要とする。そして材を欲しいという方の要望もある。切り方、長さなど何に加工するかまで考えなければならない。</p>
小澤委員長	<p>間伐は11月なので、10月の緑化フェアには間に合わない。</p>
近藤増男委員	<p>日程的には、枝打ち～間伐くらいまでしかできない。加工については状況を見ながらでよいと思う。お手伝いについては、何をどのくらい手伝えばよいのか、また人数の不足や、場所が当初の問題であったので、場所の提供などはできる。重機の問題などあるが、あの面積であればそれ程多くの材はでない。</p>
星野委員	<p>現地を見たが、木の樹齢からしてもそれほど大きな材は望めない</p>

	思う。下草の処理に多少時間がかかると思う。
近藤増男委員	大きい下木はチェーンソーを使って処理する。間伐をしてから下の枝を切るというのもありだと思ふ。下をきれいにしておくとも間伐がかなり楽になる。
小澤委員長	作業計画は早めに立てなければならない。
藤澤補佐	この日程は議論のためのたたき台であるので、これから関係者が集まって日程等を詰めていければよい。何も無いところでは議論もできないため、これから具体的な作業計画を立てていく。
小澤委員長	現地で一度作業計画などを見ていただき、同時に材の利用法についても他のフィールドで利用できないかなどを含め打合せをしていただかなくてはならない。
藤澤補佐	具体的に動かすプロセスを日程的にもつめていく必要がある。
森谷委員	プロジェクトの動かし方について、内部の情報伝達がうまくいっていない。全委員の共通認識の中で動いていない。私のなかで森林事業の中心団体など計画し、プロジェクトの進捗状況についての情報を待っていたが、全く連絡がこなかった。プロジェクトが全体で共有して動いていない。森林に関しては測量をし、地権者との契約を結ぶなど具体的なプランに向かって計画を作っているが、今後の進め方に関してはもう少し情報共有を計ったほうが良いのではないかと思う。
小澤委員長	委員の皆様が具体的に共有できるように検討していかなければならない。
近藤増男委員	久野の団体ではどなたにお願いできるのか。
森谷委員	例えば育林隊、山盛の会などにお願いすることは可能である。具体的に森のなかまをコーディネーターにすれば実務的なことは森のなかまが主体となって実行すればよいのではないか。
近藤増男委員	流れは分かった。せっかく応募されたので森のなかまが動ける範囲で実施できるフィールドを見つけたが、主体的な主導者を見つけたいといけない。わたしも地元で精通しているほうであるので出来る限り協力していきたい。私の考えでは森のなかまが主体となって実施していくのだと考えていたが、地域と協力して私たちがどの程度コーディネートできるのかを相談していただくと良い。そのためのたたき台を行政が作成してくれた。
藤澤補佐	今日の動きは具体的に動かしていくための皆様との共有化を計ろうとするものである。何が問題であるか、具体的に担い手は誰かなど取組みを進めていかなければならない。具体的に進めるための課題を抽出し、結果的に活動としての成果を出す。
井澤次長	コーディネーター役の団体なり個人なりが必要であるなら誰が中心となって動かすのかを決めていただきたい。実際に森のなかまのメンバーが主体となって実施していくとして、素人の方よんでイベント等を開催できるのか。対象はどこにおくのか。目的は何か。どのような流れでやるのか。人数は大人でどの程度必要か。今後は大人だけでなく子どもにもやっていただくとか。子どもを参加させるために環境学習として実施を募るとか。そうしたときに森のなかまの皆様によっていただくのではなく指導していただく。
山本委員	アクションプランとしてご提示いただいたと思うのだが、1番目の2番目のモデルと3番目のモデルの違いで今後の進め方が大きく異なると思う。モデル事業を示すことで市民にどのようなアプローチをしていくのかについてももう一度具体的にお教え願いたい。この取組みが環

	境再生として広がっていくために、いろいろなプランがなされていると解釈してよろしいか。そのために、どのように働きかけていくのが重要だということだが、荒廃した山林の手入れをということで森のなかまが提示したのは、小田原地区で山を手入れすることで環境再生の事業となることで応募した。ただ、山の仕事をするときによつて、子どもを参加させようにも間伐させるために森のなかまが中心となつて行うにしろ、すぐには間伐できない。間伐に関しては、初めての方と慣れている方では差が生じる。
井澤次長	そのあたりを決めていただければ良いと思う。
山本委員	見極めていくことはできるが、環境再生はなぜやるかということになる。
井澤次長	間伐していくのであれば、結果を求めているということになる。
山本委員	ある程度マニュアルを作って実行するほうがよいのではないかと。まず、調査をする、測量するといったように順を追って実行するほうが次に生かせるのではないかと。
藤澤補佐	どの取組みも現場を確認すべきというのはある。
大野委員	川掃除についてだが、討論をしているのでは川はきれいにならない。間伐が思ったようにできなくても現地に足を運んで現状を知ることが目的でよい。環境ボランティア団体と段取りを決めていけば良いと思う。間伐の楽しさに気づいていけば、次につながり仕組みを構築していければよいのではないかと。間伐は間伐だけでなく川掃除をした際に、間伐した材をプランターとして利用することも出来る。お互い別のボランティア団体と交流する。
香川委員	最初からの検討の中で専門家だけが活動するのではなく地域の人を巻き込んだ活動にしていかなければならない。このプロジェクトの趣旨として継続的に実行していく必要がある。
森谷委員	それは今年度すでに確認されたことである。具体的なことをすすめるべきである。地権者と会えばすぐにでも活動を始めることが出来る。森のなかまは測量も出来るし、毎木調査もできるし、機材もそろっているし、インストラクターもついている。団体としてのレベルは良くなっている。市民協働をつくるという目標で早めに取り組んでいければと思う。
星野副委員	地域の人間として、あの現場は道路に面しているし人目につきやすいことから素晴らしい物件であると考えている。森に関わる団体がこんなにも多くいるなんてこのプロジェクトを実行するまで知らなかった。その中でコーディネートを誰にするかという結論がなかなか出せない。それは皆さんの合意の中で決めていただきたい。
小澤委員長	主体をどこか、提案していただいたところからすすめていくとあるが、この委員会はあくまでもバックアップが目的である。
星野副委員	森のなかまや育林隊などたくさんあると思う。
森谷委員	森のなかまが仮の主体となつてやりますが、電線がある場所もあり、河川もあるため、関係など業者に連絡していただかないといけないなど委員の連携も必要である。
小澤委員長	極力現場を確認する必要がある。問題点をリストアップする必要がある。
近藤増男委員	周りの地権者の方には話を通してあり、車で来られた場合隣の茶畑を駐車場として使用できるように話してある。
小澤委員長	今年度は期間的にもマンパワー的にも出来ることとそうでないこと

	が限られてくる。環境教育もやりたいが、それは出来る範囲で実施するほうがよい。
井澤次長	これに関しては、山本さんと事務局が打合せをして、何をするかを決めていけばよいか。
小澤委員長	現地確認が最優先ではないか。
森谷委員	現地確認はもう済んでおり、次に地権者との打合せをする予定である。
近藤増男委員	地権者との話し合いをし、年内計画の概要をお話したほうが良いかと思う。
小澤委員長	次に片浦について村越委員よりお話をしたい
村越委員	片浦に関しては自治会の方が動くということであったので、話を事務局の方で聞いていただいてイベントの内容や白糸川までの散策路の予定表を作成していただいている。具体的などころについては、まだご本人とお会いしていないので先ほど事務局がお話したことと同じである。
藤澤補佐	<p>だいぶ時間が空いてしまっている。地域モデルとして上がっているのは3つほどあるということで共有していただいていると思う。一つは片浦である。ほかに田島、下曽我がある。下曽我は地域としてそこそこ力がある。具体的な活動については待っている段階である。</p> <p>どういうイメージでどういうたたき台でというビジョンをもっていないと分からないので、こちらが申請者とヒヤリングさせていただいてまとめたものが本日の資料である。今後この内容をより具体的にし、さまざまな課題を見つけ改善する方向をつくっていくのが本日の趣旨である。</p> <p>自治会長さんと申請者の内田さんとはお会いして、今後のイメージの確認を図った。</p>
小澤委員長	申請者からまた出てくるということか。
藤澤補佐	実施にはまだ動いていない。
森谷委員	<p>実際には動いていないということであるが、下曽我では個人的な関係があり自分がお手伝いに行ったりしているので、表に出てきていないだけであると思う。</p> <p>地域に関しては出来ればもう一度ワークショップを開いていただき、地域と市民活動系の課題別の団体がどのように協働していくかを検証、モデル事業のテーマになるのではないかと思う。自治基本条例検討委員会でも、市民協働と地縁型組織と市民活動活動型の組織が協働していけないかというものがテーマになっている。ここが地域を作っていくことになる。</p> <p>ぜひこのテーマでワークショップを実施し、具体的なことを取決めていきたい。</p>
藤澤補佐	ワークショップを開くためにもたたき台として材料を提示した。
小澤委員長	時間的にも早めに実施したほうがよいのではないか。
藤澤補佐	地域の事情があつてとまっているものもある。根府川については7月中旬までは自治会長さんとキャッチボールを行い活動主催者側の総意の形成を待っている状況である。
森谷委員	地域型はほかにもモデルが応募されているが、委員の動きを待っている方もいる。皆さん期待されているが、こちらが動かないために何をしているのだという話がでている。
香川委員	地域のモデルは7月中旬までにまとまってくるということか。

藤澤補佐	完全にまとまってくるのではないが、地域の中でも調整しないと いけないことがある。申請をしている内田さんは白糸川で動いているが、 白糸川の地域としての位置づけをまとめなければならない。 個々が動きづらかったこともあり検討委員会が遅れた。
大野委員	私たちの出来ることは、応募してきた方の決心を促すことである。 この会議では、失敗したことやうまくいかない原因について具体的に 話してもらいたい。抽象論より、具体的なケースについて検討策を 考えるべきで、それがこのPJの成果になると思う。
藤澤補佐	川の流域にも地権者がいらっしや、地元の方が調整をしている。 しかし、あまりうまく機能していないのが現実であり、うまく動いて いない部分がある。地元にも地元の事情があり、やむを得ず遅れてし まっている。
村越委員	川の流域は河川課でどのように扱っているのか。土砂に関する危険 地区の設定が横浜、箱根方面でされている。こちらの地区ではどのよ うな扱いになるのか危惧している。
近藤忠委員	私も気になっている。地元の方の思いが共有できなければ、始まる までに時間がかかってしまい、思うような動きがとれないといったよ うな性格がある。かなりデリケートな部分であるのでその辺をないが しろにしてアクションを起すことは出来ない。
香川委員	おかめざくらとあるが、これは一つの成功例であると思う。ガイド 協会ではこのおかめざくらのイベントを企画している。 こういった成功例がどのような方法で実施されたのかを参考にする のも良い。
星野副委員 長	実証モデルの選定になって、地権者の問題など地域の足並みがそ ろっていないということであれば時間的に無理があるのではないかと 思う。
藤澤補佐	最初の応募の段階であったのもあるし、ワークショップの段階で全 ての課題が分かっていたわけではない。
香川委員	現時点での情報を収集することが重要なのではないか。
藤澤補佐	そのためには皆様のところで共有化する情報は何なのかを含めて検 討しなければならない。
小澤委員長	地域のプロジェクトを進めていくために必要なことである。どう いった課題があるかを検証していく必要がある。
森谷委員	そこが一番課題で、市民団体が地域にお手伝いに行くときに地域の 問題を解決してもらうのは地域の人である。地域の方が合意を形勢し たのち、足りない技術であるとかわれわれは後方支援するほうが良い。
香川委員	必ずしもそうとは限らない。うまくいかなくなってしまう時に 我々が意見することでまとまることもある。 ただ、現時点の状況を事務局の方からフィードバックしてもらうこ とも必要である。
藤澤補佐	今の現状を踏まえて現場に行っていただくとよい。ただ主体者のか たもお忙しいのでなかなか時間をとっていただけないという現状でも ある。
森谷委員	担当のことであるが、森のテーマは森のなかまが主体であるが地域 の部門は事務局側が主体であるという考え方でよろしいか。
小澤委員長	行政側が動かなければならないケースもあるとうことでよいのか。
藤澤補佐	そういうことではなく、行政側が動いたほうが良い部分もあるとい うだけのことで、委員が動いていただくのが理想であり、この件に関

	しては村越委員に動いていただいていた。
小澤委員長	現状では行政にやっていただくしかない。
藤澤補佐	内田さんとの連絡調整は継続的に行っていきたい。
小澤委員長	森谷委員の提案であるが、地域の課題に関してはワークショップを実施したほうが良いのではないか。
藤澤補佐	少なくとも片浦地域（根府川地区）で担い手になる方を集めると20名くらいいる。彼らが実行する中で支援方策として、民：民の関係でどのような関わりができるかを課題だと思っている。 ただ、闇雲にワークショップを開くのはどうかと思うので、早い段階で全体像をイメージして応募してきた方のお話をもう少し聞くことが必要である。
森谷委員	そのとおりで、応募された方は環境再生プロジェクトはいったい何をしてくれるのかという疑問をもっている。最初のワークショップで3つのグループに分けてしまったので、地域連携についてというテーマで全委員に声かけをして開催したほうが良い。地域と地域が連携できるかもしれない。
大野委員	我々がやれることは、単純に応募者に対して連絡をとることくらい。そこで困っている点を聞いてフィードバックする必要があるが、全てのテーマに対応していくのは難しい。
小澤委員長	おそらくいろいろな人が集まって解決できる部分はあると思う。
森谷委員	我々が手を掛けなくてもコーディネートをすることで自然に動ける環境づくりの実証がそもそものテーマである。
近藤忠委員	ワークショップなどに参加することはこの委員会に何か期待をしているからである。自分が出したテーマについて何の対応もないと困惑してしまう。ワークショップは各自の事業案をモデルにという意識でお互いを高めあうものではなかったと思う。委員は3つのテーマに分担して、提案者や地元の人に接触し、事務局と相談すべきだと捕らえていた。森のテーマについても当然そうされていると思っていた。川のチームでは、手探りの状態で何度も電話したり、委員で集まって情報共有していた。
小澤委員長	市民の主体的な動きを望んでいるのはやりかたがまずかったのかもしれない。森谷委員がおっしゃるように一度集まるのも必要かもしれない。
村越委員	メーリングリストなどを活用するのは、応募者の方も参加されているのですか。
森谷委員	それを検討したい。
村越委員	これから先応募されているかたが色々なイベントを開催することもあるだろうし、共有する場を増やすネットワークを使うのは重要である。
星野副委員	今までそのようなことをしてきて、話も集約されているので今後どのようにしていくかを考えたほうがよいのではないか。
近藤忠委員	基本的には現場で活動の中から必要な機能を抽出するべき。後半になるとメーリングリストは必要になるが、今やるべきことは電話連絡をするなど実績を積み重ねていくことが必要である。
小澤委員長	メーリングリストは必要であるが、委員会とは別のものとして捕らえたほうがよい。将来的には必要である。
森谷委員	意識改革と情報共有がテーマなので、いかに情報共有を明確にするかの手段を検討し、依存するところからの意識改革というテーマで

	ワークショップを行うことが必要である。
--	---------------------

2) 環境再生プロジェクトの仕組みの検証の考え方について

藤澤補佐	今後この検討委員会の必要な機能について検討していただく。断片的に意見を頂いたことはあるが、全体的には何を必要としていくかを話し合いたい。中身をみて云々というより中身を話し合う中で確認し中身の精度を高めていきたい。
小澤委員長	プロジェクトの中で検証していく内容である。これを見ながら事業を組み立てないといけない。足りないところがあれば提案していただきたい。
大野委員	活動から得られたことだが、花を植えようとしたときに事前に地域の人々が活動していた場合地域の人へのアプローチをどうするかなど迷うところはある。
香川委員	なにか事例のようなものがあるとよい
近藤忠委員	当事者とのやり取りの中でモチベーションを下げないでどのように実施していくか。メールなどでやり取りをする中でかなり苦労するものがある。管轄や自治会の問題などがあり、先延ばしになるようなこともある。文書化したものを事務局に投げ、その中から必要な要素などを報告書に盛り込んで行く。うまくいかなかったことなどを委員内で共有していきたい。
香川委員	自分の思ったこと、成果があがったことなどがこの中のどこにはいるかが必要である。
井澤次長	報告書についてだが、機能としてはこの資料に出ていると思う。具体的に実施したときにでた課題などをまとめていきたい。事務局に出してもらいまた検討を重ねまとめていきたい。
小澤委員長	具体的な事例が財産である。そこから抽出していけばよい。
森谷委員	総説と事例研究を作らないといけない。最後のまとめは個人の資質で書くものではない。
小澤委員長	そのような構成で書いていただきたい。中身のほうはまだ時間がある。
藤澤補佐	国の事業(地域主権)の緑の分権改革に応募したが、一応内示がそのような状況になってきている。事業の組み立てとして活用していきたいと思っている。環境再生だけでなく、生ごみ検討委員会、エコシティなど含め全体の内容をつめていきたいと思っている。
小澤委員長	グリーンがテーマで地域が関わる事業ということで応募していた。再生プロジェクトとは予算がない中でやっているのだからこれからどのようにやっていくのかという感じである。

平成22年度 第3回小田原市環境再生プロジェクト検討委員会の予定
 第3回： 月 日()午後予定